

香筵とコミュニケーション

—過去・現在・未来を結ぶ—

● 上 村 代志子

・・・静寂な空間と時の流れの中で香を聞く。感じるままに何も考えず目の前の香木の小片から醸し出される香気と向き合う。大きく息をする。掌には仄かな香炉のぬくもりが伝わる・・・聞香の素朴な情景である。

香りは嗅ぐとは言わず聞くという。全身全霊で香りに向き合うということであり、「日常的な生活から心身を解放して別天地に身をゆだねる」という遊びの精神も存在する。

現在行われている香筵、香席は大勢の連衆（客）を招く大寄せが多く、落着いて香りを鑑賞し難い。しかし、伝統的作法とルールで、スムーズに香筵は進行していく。

香筵では二種以上の香りの違う香木を用い、和歌等の古典文学に因んで構成された「組香」が行われるのが殆どであり、同じ香りか異なる香りかを当てるというゲーム性もある。香筵は自己と他者が共有する空間と時の経過の中で、相互に影響し合い、各自の世界を構築しつつ、統合された世界を共に作りあげるという多重構造を持った多様なコミュニケーションの場である。

ここでは香筵に見られる身体的な関わりと嗅覚の生理的機構にスポットを当てて、まずは代表的な組香の構成から述べる。

（１）組香の構成

「宇治山香」

わが庵は宮この辰巳しかぞ住む世をうち山と人はいふなり

（喜撰法師『古今和歌集』）

宇治山香は組香としては初期のもので、この歌に因んで創られた。

五、七、五、七、七の五句に分け、それぞれに異なる香りを割り当てたものが用意される。連衆は先ず試香としてその五種の香りを聞き、香りを記憶する。

本香では同様に用意された五種のうち一種が無作為に選ばれ炷かれる。その

香りを聞き当てる。一種のみ炷くのは、喜撰法師の歌が一首しか伝わっていないことを意味する。

風流を友とし静かなたたずまいに暮らす喜撰法師の歌を味わい、その歌の趣に沿って名付けられた各香りの香銘から受ける情景や物語などと共に、更にイメージを膨らませる。

「白河香」

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関

(能因法師『後拾遺和歌集』)

「霞」「秋風」「白河の関」の香りが用意される。試香では「霞」「秋風」を聞いて記憶する。本香ではその二種に「白河の関」を加え、三種の香りが順不同で炷かれ、その出た順を答える。

本香の答の正解率が言葉で表現され、全部正解の時は「関越ゆる」、全部不正解の時は「関止」、霞のみ正解の時は「春風ぞ吹く」、秋風のみ正解の時は「紅葉散る」、白河の関のみ正解の時は「旅衣」となる。

連衆は昔日の旅をイメージしながら香りを味わい、採点の表現の面白さも楽しむ。

組香は当てるのが目的ではなく、香りを鑑賞しつつイメージの世界で遊ぶことに主眼が置かれている。

(2) 一期一会の呼吸

香筵は茶会と同様に神社、寺、庭園などに付随した建物の座敷を使用することが多い。現代の若者たちは子供時代に体をぶつけ合う遊びをせず、体の触れ合いの中から形成されるコミュニケーションの基礎が磨かれていない為か、香筵でも体が触れるのを嫌がる傾向があるが、椅子席の立礼の場合には整然とした席となる。

作法の面でも茶道と共通点が多く、連衆は通常コの字形に座し、座敷では畳半畳に一人が座るのが良いとされている。初対面の人と隣席になることも多く、香炉などを回すときの気配や腕の長さなど、身体的にも物理的にも隣席との適切な距離と空間である。畳の縁が境界線の役割を果たし、自己と共有のスペースを区切る。

はじめは連衆同士が各自の存在感に左右され、黙って視線のみを互いに送っ

ているが、香元、執筆の入席により一気に緊張感が高まる。香元が道具を並べ、帛紗を構えてさばき始め、呼吸を整えると、その呼吸に連衆も同調して一つにまとまっていく。

香炉が回ってくると、上座の客は両手を膝前に軽くついて、下座の客に、次礼と称される「お先に」という挨拶をする。下座の客も同様の姿勢で目と目を軽く合わせる。

香炉が自分に回ってくる直前に行う次礼のタイミングを計るのは緊張を要し、気配を感じ取らなければならない。米粒程の香木は香りが変化し易く、スムーズに香炉を回すためには、自分に回ってきてから挨拶するのでは遅い訳である。香炉は三息で聞くという決まりがあり、タイミングは計り易い。

香炉を回す時、静かな声で「試香〇〇でございます。」「本香〇炉でございます。」と次々に伝達していく。これらは次礼も合計すると、流儀によっては1回の香筵で10回以上、多い場合は20回を超えることがあり、声かけの言葉やトーンも異なる。

香炉が回ってきて聞いている状態は緊張、次に回ってくる間は弛緩という反復が早く、沈黙にも意味や価値を見出す。香りは刻々と変化し、全員が異なる香りを鑑賞しているという不可思議な世界でもある。

試香と本香が終り、連衆の答の用紙が集められ、一枚の奉書にまとめられている時間は、香りに浸った余韻のひとつときとなる。そして、その記録が回される頃には和気あいあいの雰囲気となっている。

香筵を通して見ると、実に巧みに演出されていることに気づく。序・破・急という程激しくはないが、快いテンポとリズムが生じる。しかし、常にそのような状態になるとは限らず、全員の「息」の相互作用による。齋藤孝氏は「“息が合っている”と表現されるのは、各人の動きが一つの全体を構成し、調子よく流れていくように感じられる場合である。全体の流れが乱れることがないためには、各人が他人のテンポを感じ取りつつ、自分のテンポを微調整する技術が要求されるのである。」と述べている。

（3）型を超える

日本文化は「型から入り、型から抜ける」型の文化と云われるが、宮本武蔵は『五輪書』のなかで「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とす」と言い、歌舞伎役者の坂東玉三郎氏は「舞踊は型を習い、稽古を積み、本番の舞台では

その型の通りに舞うだけです」と云っている。そして世阿弥の『風姿花伝』に「離見」、「離見の見」という言葉があるが、能楽師の観世寿夫氏は「観客の主体性と演者側の主体性が相反することなく、一体となってその舞台を経験し、演者は観客を意識することも、無視することも、おもねることも無く、自分の能を創りあげることができる。私は“離見の見”をこう読む。」とある。

香筵において香元は香木の香りを最大限に引き出すことが最も重要な役割であるが、その手前は型の連続となる。同時に進行役でもあり、間を計り、時間と空間に制約されつつ連衆に気を配り、息を合わせるようにするのは前述の通りであるが、それは型が次の型に移るタイミングが契機となる。

連衆が香を聞く型も定められ、流儀により作法、ルールに多少の違いがあるが、顕著なのは上客（正客）が香元の右手に座すか、左手かであり、香炉の回し方と扱いが異なることである。腕の動きや手首の捻りが異なるが、このように型は年月を経て、合理的に美的に洗練されたものである。

香を聞く時、左の掌に香炉を載せ、右掌で香炉の上を被い、一体となる。それは香炉を挟んだ合掌の形と見ることもできる。

すべて所作は型を追うこととなるが、香りによりその型を超えてイメージの世界に遊ぶことが可能となる。

座敷では正座をすることが礼儀となっているが、どんな人でも正座の姿はその空間で安定し、毅然としていて美しい。これも一つの型である。礼儀正しさはルールと共に重要視され、立ち居振る舞いだけでなく、服装、髪型、化粧などにも及び、回を重ねる毎に連衆に相応しい自己表現ができるようになり、他者への配慮と思い遣いの精神が培われ、認められる存在となっていくと云われている。

（４）香木のロマン

沈香の香りの成分分析は戦前より行われていたが、1980年代アロマセラピーの普及により日本でも分析技術が大きく進歩し、高砂香料工業（株）の研究者により、それ迄に分析されていたセスキテルペン類が更に精査され、ジンコール等、特有な化合物の構造が解明された。その後も研究は進められ、ベトナム、カンボジア産の沈香の最高級品とされる伽羅と同等の伽南香からジヒドロカラノン、カラノン、オキソアガロスピロールを単離、構造決定し、新規のテルペン化合物の存在も報告された。しかし、微量で未知な化合物もあり、これらの

化学合成は非常に困難で、研究者たちのチャレンジが続いている。

昔も今も使用している香木は総て輸入品であり、東南アジアを中心とする地域でのみ産出され、ジンチョウゲ科のアキラリヤ属等の樹脂が永い歳月を経て化学変化を起こし、一部の上質のものが温めると芳香を放つ沈香となる。沈香が合成困難であることは、寧ろ悠久のロマンを感じさせる。

今日我々が聞いている沈香の香りは、室町時代や江戸時代に公家や武家が聞いた同じ香りであるかもしれない。香りを媒体として、今同席する人々とのコミュニケーションばかりでなく、時空を超えた先人とのコミュニケーションも得られるであろう。

（５）嗅覚の生理学

嗅覚と味覚はその受容機構は異なるが、刺激物質は全く相違するものではなく、機能的に多くの共通点を有している。匂い物質は揮発性であるばかりでなく水溶性、脂溶性であり、味物質も水溶性、脂溶性であるから、多くの匂い物質は味物質となり、味物質も匂い物質となる。

香を聞くと、同時に辛いとか甘酸っぱいとか味を感じる。「味」と感じているものの多くは鼻で感じる「香り」であって、例えばオレンジジュースとリンゴジュースを、鼻を塞いで飲むと殆ど区別できない。ジュースは加熱滅菌すると揮発成分が散失してしまうから、処理後に「香料」を加えて市販されている。両者の決定的な相違は、味ではなく香りである。

嗅覚は鼻腔内に吸い込まれた匂い分子が嗅上皮を被う粘液に溶け、嗅細胞の絨毛が有する匂い受容体に結合する。香を聞くのは雨や雪など湿度が高い時が良いことが裏付けられる。

匂い情報は脳の下面から前方に突出する一对の平たい楕円形の嗅球に入る。嗅細胞は生涯を通じ、約60日周期で基底細胞から新たに生成されるから、嗅神経の中樞枝は嗅球において絶えず新たな神経細胞間の情報伝達の間、シナプスを形成する。この点は他の神経細胞と大きく異なる特徴である。

味覚は味覚神経が分布する受容器、味蕾が存在する乳頭で感受され、味情報は脳の下方、延髄に入る。

味情報が味神経を通して脳に伝えられるのに対して、嗅情報は直接脳に伝えられる。

両細胞共、受容膜を外部に露出し、それぞれ匂いまたは味物質を受容するこ

とは前述の通りであるが、匂いや味物質は、露出していない基底膜表面のイオン環境が生理的に安定していることと、細胞間の密着結合により、あまり拡散せず、Gタンパク質（グアニンヌクレオチド結合タンパク質）を媒介として情報を増幅する。また、活動電位の発生があり、発生した活動電位は、受容器電位を減衰させずにシナプス部まで伝え、そこで電位依存性カルシウムイオンが流入、酵素反応を起こして神経伝達物質を出し、匂いや味の情報を脳に伝える。

神経細胞が一般に備えているシナプス機構は、内在性の神経伝達物質だけが刺激物質であるから、その種類は限られている。嗅細胞、味細胞では刺激物質が外来性であるため、匂い物質、味物質の種類は非常に多い。

匂い分子は40万種を超え、その分子構造も多様である。味覚は生理学上、甘味、塩味、酸味、苦味、旨味の5種を基本味質としている。聞香では江戸時代より辛、甘、酸、鹹、苦の五味とされ、鹹は海藻を燃やした時の塩辛さと云われている。

嗅細胞や味細胞は、環境の化学情報を電気情報に変換するが、シナプスを介して再変換して脳神経細胞に伝える。脳の神経細胞も、化学→電気、電気→化学の情報変換を繰り返し行っている。

大脳辺縁系のうち、内包と視床下部の間にある扁桃体は種々の機能に関連する神経細胞集団であるが、嗅球より多くの入力があり、逆に扁桃体より嗅球への投射も確認されている。扁桃体内部の投射回路のうち、海馬領域から扁桃体内側核への投射もある。海馬は記憶を獲得する際の一時的な記憶の貯蔵中枢として極めて重要な部位であり、これらの細胞集団は密な双方向の連絡が認められ、その機能は、個体が生きて行く上で最も重要で、原始的機能を司ると考えられている。何かを「したい」「したくない」「好き」「嫌い」という脳機能の中で比較的本能に基づいた基本的な、一般に欲求（動機）及び情動と呼ばれる生理、つまり生と性に関する機能や学習、記憶、認知等との関連が示唆されている。

香席で、ある小学生は「お母さんの匂い」「お菓子の匂い」と表現し、女子学生は「父の匂い」とか、好きな人や過去の懐かしい情景を思い起こした。

人間が得る情報の80%以上を視覚が占め、嗅覚はごく僅かであるが、嗅覚の刺激は脳を活性化し、人間を様々な行動へと導いて行く上で大きな影響を持つと云える。

嗅覚は人間関係のコミュニケーションを深めるために極めて重要である。

（6）未来へ

三條西公正氏は「手前（香元）そのものは、我々の生活様式の中から生まれたものである以上、それが今日の如く大きく動いている場合には、当然それに適合した様相が生まれてしかるべきではなかろうか。それが未だ実現されていないところに、あるいは先師からの伝授に忠実すぎる観があらう。伝授と呼ばれるものでも、その様式は随分変化している。見方によっては、変化があればこそ今日に生きているのであり、その変化は血のにじむ研究と体験の結果に他ならないのである。（中略）香の芸術味を研究することを一般的に怠りだしたのは、昨今に始まったことでなく、その風潮はすでに18世紀頃から現われている。」と述べている。

一休和尚伝とする「香の十徳」に「感格鬼神 清浄心身 能除汚穢 能覺睡眠 静中成友（後略）」とある。香の効能を伝えるとされているが、そればかりでなく心を伝えるものであると考える。香は自己の超越へと至らしめるものであり、また香により人は身も心も潤い、心が開き、和も生じる。しかし、形無く虚空に満ち、有でも無でもない。そのような香に心を澄まし内なる声を聞くことが真髄である。一休より更に先人達の香への想いを伝えている。

伝統は変化していくものであるが、時代の好みに即応するのではなく、本質的なものは守り伝え、より良い方向へと進まなくてはならない。

「香」の本来の有り方を見つめ、再構築し、発信し続けることが重要である。

【参考文献】

- ・ 鈴鹿周齋傳『香道蘭之園』
- ・ 尾崎左永子・薫遊舎『香道蘭之園』（淡交社、2002年）
- ・ 三條西公正『香道—歴史と文学』（淡交社、1971年）
- ・ 齋藤孝『息の人間学』（世織書房、2003年）
- ・ 観世寿夫『心より心に傳ふる花』（白水社、1979年）
- ・ 山田憲太郎『香料—日本のにおい』（法政大学出版局、1978年）
- ・ 江村誠「香木の科学」（高砂香料時報 No.141、2002年）
- ・ 遠山正彌『分子脳・神経機能解剖学』（金芳堂、2004年）
- ・ 有田秀穂『脳内物質のシステム神経生理学』（中外医学社、2008年）